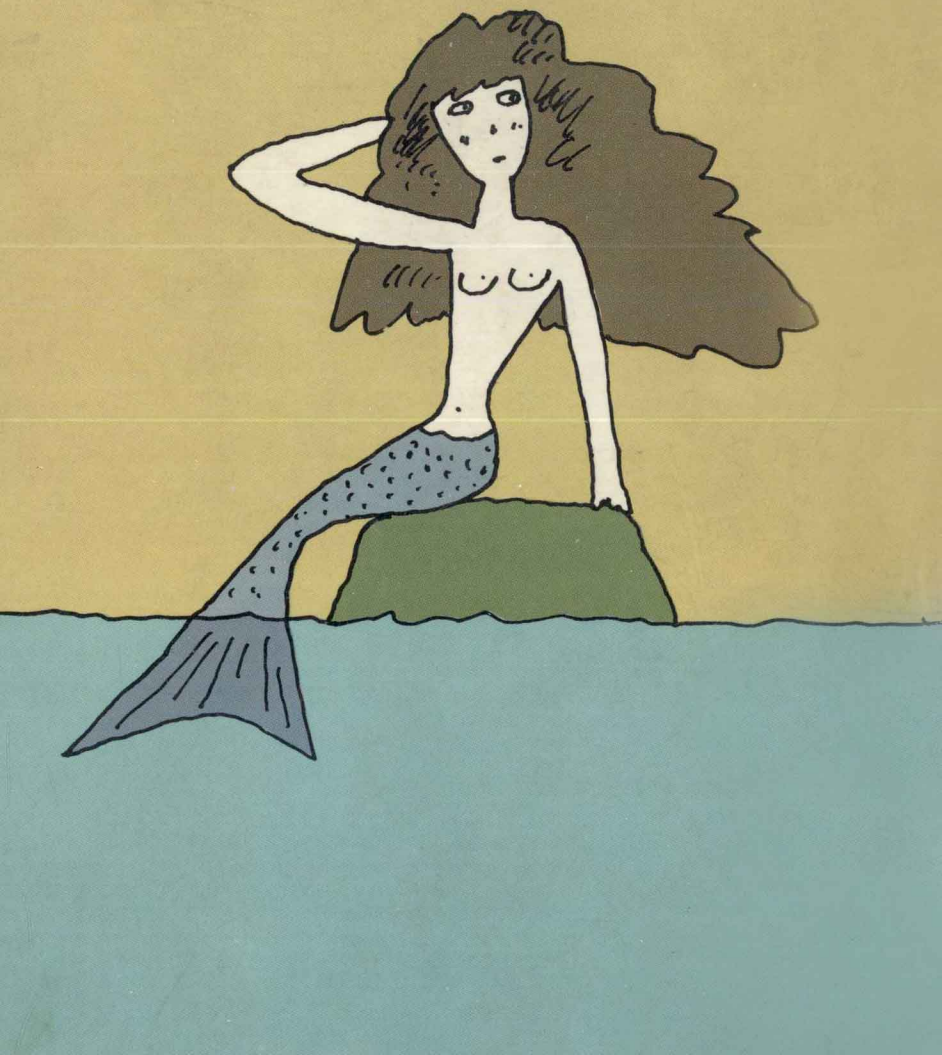
ひとりよがりの人魚

田中小実昌



ひとりよがりの人魚

田中小実昌

文藝春秋

田中小実昌(たなか・こみまさ)
1925年東京に生まれる。東京大学文学部哲学科中退。種々の職につき，二十年ほど前からチャンドラー「湖中の女」などの翻訳をはじめる。72年「自動巻時計の一日」で直木賞候補となり，79年「浪曲師朝日丸の話」「ミミのこと」で第81回直木賞を受賞。著書に「上野娼妓隊」「香具師の旅」「ポロポロ」「ビッグ・ヘッド」など多数。

ひとりよがりの人魚
昭和五十四年九月十五日第一刷
定価　八八〇円
著者　田中小実昌
発行者　杉村友一
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五・一二一一
印刷　共同印刷
製本所　加藤製本
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Komimasa Tanaka 1979　Printed in Japan

叔父の日記ノート　5
C面のあるレコード　25
動機は不明　33
逃げた凧　63
11PM殺人事件　87
50グラムの肉片　111
同業がよくくるバー　141
部分品のユーレイ　167
アセチレン灯　181
ひとりよがりの人魚　207

装幀　和田　誠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひとりよがりの人魚

叔父の日記ノート

十月十九日、木曜日。雨。

十月二十日、金曜日。快晴。

昨日は、雨、となっているのを見て、自分が書いたことだが、うそ寒いおもいがした。ふつうならば、ショックというところだろう。しかし、虚ろな、底のないところで、さけび声をあげても、ひびきかえってくるものはなく、そんなふうだと、ショックとは言えない。じつは、さいしょから、さけび声などでないのだ。ふんばるものがあるから、力もでる。ふんばるものがなければ、力もでない。

昨日という日は、雨。ひどい雨でもなく、また、雨がとぎれることもあったが、私は、雨、とだけ書いた。これは、理不尽なことではないか。昨日が腹をたてるのではないか。

しかし、(私の)昨日は腹をたてない。怒れない。私に雨、と書かれたままだ。

その日が、雨、だったり、晴、だったりするならば、死、という日もあるだろう。そして、昨日を、雨、と私が書いたように、それは、死、と一字ですむか? しかし、雨だったり晴だったりといったぐあいに、その日が死だったり、死でなかったりということはあるまい。

ぼくは、信也叔父のノートを、途中から、ぱらぱら、ページをめくってみた。ごくふつうのノート・ブックだ。叔父が出かけるときには、いつも肩からぶらさげていたショルダー・バッグに、楽にはいるノート・ブックで、また、叔父は、出かけるときは、このノート・ブックをバッグにいれてもちあるいてたのだろう。だからノートの表紙のはしがまるくめくれている。

くりかえすが、これは叔父のノートで、毎日、書いてるわけではないけど、書いてるときは、だいたい、日付や曜日などもはいってるから、日記と言えないこともない。

この日記ノートは、叔父の四畳半の書斎の掘りゴタツ式になった机の上にあった。それを、きょう、ぼくは見つけたのだが、十一月のおわりのきょうまで、この日記ノートに気がつかなかったのは、机の上という、なんでもないところにあったためかもしれない。

信也叔父は、ぼくの母の弟だ。しかも、うちの母よりは、かなり歳下で、だから、ぼくとはあまり歳がちがわない。

叔父はある女子大の英文科の助教授をしていたが、大学はやめて、翻訳の専業になった。だいたい、人づき合いのきらいな男で、大学での人間関係がいやになったらしい。

翻訳は、訳す本がきまると、ひとりで、コツコツやって、できあがれば、出版社にわたせばいい。叔父みたいに、人づき合いが下手で、きらいの者には、向いた商売だ。叔父は独身で、子供もなかった。

じつは、ぼくも翻訳をやっている。ミステリやS・Fなどで、ぼくの翻訳した本がベストセラーなどになったことはないが、ともかく食っていってる。

ぼくは、高校も途中でやめて、アメリカに行き、十年ほどぶらぶらしていたあと（ぶらぶらといっても、働かなきゃ食えないから、日本料理屋の皿洗いとか、漁船にものったし、バーテンな

んかもやった）ニホンにかえり、翻訳でもやろうかとおもい、叔父に相談すると、叔父は、自分の先輩にあたるNさんのところに、ぼくをつれていった。

甥のぼくでもだれでも、たとえば下訳をさせて、翻訳をみてやるなんてことは、叔父はめんどうくさいし、そういう関係をもつことも、叔父はきらいだったのだろう。結局は、叔父はやめてしまったが、女子大の先生をしていたのが、ぼくにはおかしい。ま、叔父も若かったのだろう。しかし、講義のとき、すぐ赤くなったりする叔父は、学生には人気があったらしい。それに、叔父は頭がよく、この頭がいいというのは、頭がすっきり、澄んでいて、だが、ぬけてるようなところがあった。ほんとに頭がいい者に、ときたま見かけるナイーヴさがあったのだ。女子学生たちには、叔父は頭のいい赤ちゃんみたいにおもえたかもしれない。

十月二十一日、土曜日。晴。

いい天気だが、風がある。ガラス戸が、風でカタカタ鳴っている。こんなふうに書くと、かなり風が強そうにきこえるのが、おかしい。実際に、ガラス戸はカタカタ鳴ってるが、それほど強い風ではない。

しかし、自転車での散歩をたのしむというわけにはいくまい。風があると、自転車はのりづらい。瀬戸内海の大崎下島で、自転車にのったときのこと——。

大崎下島は広島県の竹原のほうからきて、いちばん四国よりで、旅館の女中さんが、子供のとき、ここから、予讃本線をはしる汽車が、白い煙をはいてとおるのが見えた、と言っていた。

旅館は、大崎下島の御手洗（みたらい）の海べにあった。御手洗は、昔は、船がはいると、舟宿の女たちが、オチョロ船にのって、船まで男たちをむかえにいったという。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その舟宿が長屋みたいにならんで、海にむかい海ぞいの道にたっていたが、花崗岩質の白い地肌に、瀬戸内の秋のしろい陽ざしがさしているだけだった。

御手洗の港というのもない。桟橋がひとつだけど……。その桟橋から竹原行の船がでるまでに、二、三時間あったので、旅館の自転車をかり、島を一まわりすることにした。

地図で見ると、御手洗の旅館があるところは、島の東側の南になっている。つまり、四国のほうに面してるわけで、だから、旅館の女中さんが、ここから予讃本線の汽車がはしるのが見えた、と言ったのも、うなずける。もちろん、今は、予讃本線の列車など見えない。しかし、四国の山は見える。

自転車にのり、島の南側を西のほうにはしりだす。道は海ぞいだったり、すこし、陸のなかにはいったりしたが、三、四十分で、神社がある集落にきた。大きな、りっぱな神社で、こんなところに、こんなりっぱな神社が、とおどろいた。

この島は上方と四国、九州をいききする船の、瀬戸内海での大きな寄港地のひとつで、御手洗の町の天満宮も古い神社だし、文化、文政のころの全盛期には、その茶屋だけで百人をこす遊女がいたとつたえられる、「若胡子屋」という遊女屋の建物が、今でものこっている。九州南端の屋久島の巨大な屋久杉を材木につかった、遊女屋というより、代官屋敷みたいな建物だ。おそらく、今でも、この町のいちばん大きな建物で、公民館になっていた。

おもいがけない、古いりっぱな神社をすぎてからは、だいたい、道は海ぞいにはしり、ながめはよかったが、自転車のペダルをふむのがくるしくなった。

海からの風が、そんなに強くは感じないのに、自転車がすすまない。それに、地図で見たこの島のかたちは、ジャガイモをよこにおいたようで、そのジャガイモの底辺を、右から左に自転車

ではしってきてるわけなので、ジャガイモのはしにそって、右へ右へと道はまがってなくてはいけないのに、自転車ではしっても、はしっても、道はまっすぐなままだ。

そして、ペダルをふむのが、ますますくるしくなった。左が海で、道はまっすぐのび、海からの風は、ミカン山のミカンの木をざわめかせるほどではないのに、胸や腹につきあたってくる。人どおりもない。クルマもはしってない。

からだをかがめ、自転車の上に這いつくばるようにして、ペダルをふみつけるのだが、自転車はのろのろとしかすすまない。

船の時間も気になった。自転車にのり、旅館をでてから、もう、なん時間たったか？　時計はない。そして、東京の町なかみたいに、時計の時間をきく相手もいない。

とうとう、自転車をおりた。風にさからって、自転車をおしていく。そのすすみかたものろく、くるしい。

前には、よく散歩にのってまわった自転車が庭の隅のビニール屋根の下においたままになってる。手入れなどはせず、もとから錆びた汚い自転車だったが、もうのることもなく、車輪を赤錆がかさぶたのようにおおい、うちすてられたといった感じだ。

阪急が三回に6点とった。きょうは、ヤクルト・阪急の日本シリーズの六戦目で、ヤクルトがこれまでに三勝してるから、きょう勝てば、優勝ってことになる。しかし、阪急に6点とられたのでは……。

五回表に、阪急が、また5点。ヤクルトは、四回裏に1点、五回裏に2点とったが、11対3では、もうしようがあるまい。

八回表に阪急がまた1点。12対3、阪急の勝。これで、ヤクルトも阪急も3勝どうし、明日の

第七戦が決勝戦になる。

十月二十二日、日曜日。晴。

とってもいい天気。うちのなかで仕事をするのにはもったいないようないい天気……自分でそんな口実をつくって、翻訳の仕事をなまけたものだ。

秋の今ごろの季節にしかない、いいお天気だろう。柿の木坂の駒沢通りのむこうのあたりを、ぶらぶらする。もちろん、住宅地だが、昔からの地主さんの家だろうか、庭に大木がある家があった。町名は、柿の木坂ではなく、東が丘というのかもしれない。

(私は)奥沢育ちなのに、そんなに遠くないこのあたりは、はじめてのようだ。自転車でよく散歩していたころは、知らない道や路地にはいると、うれしいぐらいだったが……。

庭に大木のある家には、小杉さんという門札がかかっていた。そして、もうすこしいくと、また、小杉と門札をかけた家があった。このあたりには、小杉一族がいたのだろう。

環状七号線の通りにでると、いつも、バスやタクシーで、とおったところだった。新宿からタクシーでかえってくるとき、あそこのピンクの壁があるところをはいってください、とタクシーの運転手に言うところだ。

そこの道をはいっていくと、坂を下って、上って、柿の木坂、都立大学の前をとおり、東横線の都立大学駅のホームの下をくぐって、中根、緑が丘、奥沢となる。

しかし、ピンクの壁というのは、めずらしい。あれは、なんの建物か?

環七(環状七号線)をこして、ぶらぶらいくと、竜雲寺という、新しい、モダンな建物の禅寺があった。この寺も、はじめてみたいだが、寺のうしろにまわると、そのながめには、見おぼえが

あるような気がした。
だが、それは、この近くの世田谷観音の裏からのながめがオーバーラップしてるのかもしれない。
旭小学校、明治薬科大学、中里小学校、正澄寺、舗装はしてあるが、昔とおなじように、せまくまがりくねった裏通りをいく。昔の世田谷の農道だ。
自衛隊中央病院、国土地理院……ぶらぶら、池尻まできてしまった。
池尻の交番の前に立っていた、若いハンサムなお巡りさんに、中年のオバさんが道をきいている。
オバさんはふとって、背がひくく、お巡りさんはからだをかがめて、え？　え？　とオバさんの言葉をききかえしていたが、かたっぽうの耳にはめていたイヤホーンをとった。いや、イヤホーンをとったから、イヤホーンをはめていたのがわかったのだが……。お巡りさんも、日本シリーズのラジオの野球中継をきいてたのだろう。
池尻の交番のすこしむこうの稲荷神社の境内をぬけ、右にまがって、世田谷公園へ。世田谷公園では、子供と遊んでるお父さんが目についた。世田谷公園をぬけて、バスがはしっている通りにでる。
ヤクルト・阪急戦は、松岡と足立の投げ合いで、ヤクルトが五回に1点、六回に大杉のホームランで、2点とったが、これを、ファウルだと阪急の上田監督が抗議して、試合は中断。たぶん、ファウルだったのだろう。しかし、審判は打球の行方を見るのが商売で、ほかのなん万もの者が、ファウルだと言っても、アテにはならない。
ヤクルトは八回裏に、もう1点とり、4対0で、ヤクルトが日本シリーズに勝った。
九回表、阪急の最後の攻撃で、ヤクルトの松岡投手が一死をとったときまでは、まだひきしま

った顔つきだった広岡監督が、さすがに、二死をとると、とろとろのうれしい顔になった。いつもは端正、冷静な顔つきの紳士が、ごくたまに、女性にしなだれかかったりしているときなど、よけいスケベったらしい顔つきに見えるものだが、たとえはわるいが、あのときの広岡監督の顔は、そんなふうだった。いや、たとえがわるい。

十月二十四日、月曜日。晴。

曇ってもいないが、晴、とだけ書くような日だ。昨日が、あんまりいい天気だったからだろう。なんにもしないでいる。ほんとに、なんにもしないでいて、自分がなんにもしないでいることにも気がつかない。

信也叔父の日記ノートは、まだつづいているが、読みながら、ぼくは、さっきから、頭をふっていた。なにか、おかしいのだ。おかしくて、うそ寒いような、みょうな気持がする。

叔父の日記ノートが、まだつづいている！　うそ寒さが凝固して、ぼくのうしろ頭をどやしつける……そんなショックよりも、ぼくはポカンとしてしまった。

ポカンとしてるけど、身うごきできない。どやしつけられれば、ふっとんで逃げることもあるだろうが、ポカンとし、逃げだそうにも、地面をける、その地面がうつろにくずれ、手でつかんで這いだすにも、そのつかむものも、手ごたえなく消えた。

叔父の日記ノートのおかしさは、べつに隠されていたわけではない。はっきり、そこに書かれていたのだ。また、おかしな出来事が書かれていたわけではない。

これは、あとになってしらべたことだが、たとえば、天気だとか、野球の日本シリーズの試合

はこびとか、そのほか、叔父の書いたことには、おかしなことはなかった。このおかしなこと、ちがってることがないというのが、おかしく、信じられない。

前にも言ったけど、ぼくは、叔父の日記ノートを途中から読みだした。べつに理由があったわけではなく、辞書とか読みかけの本とか、ニューヨークとニュージャージイ州の地図とか（翻訳の参考にしたのか）いろんな物が雑然とのっかった叔父の机の上の、そういった物がかさなりあったなかから、ぼくは叔父のノートをひっぱりだし、いいかげんにページをひらいて、読みだしたにすぎない。

それが、たまたま、十月十九日、木曜日の日付のところからだったが、叔父は、十月十二日、木曜日の午前二時か三時ごろ死んでいる。

叔父は、奥沢のこの家で自殺した。庭の泰山木の枝にぶらさがって、首吊り自殺をしたのだ。

この日記ノートのなかでも、叔父は、目黒区の柿の木坂か東が丘の旧家の庭で、大木を見かけたと書いている。叔父は大木が好きだったのだろう。叔父が首吊りした泰山木も、かなりの大木だ。

東京工大の前身のいわゆる蔵前の高等工業が大岡山に移転してきたとき、教授だった祖父は、大岡山とはとなり町のこの奥沢で、大木がある土地をさがして、家をたてたのだという。そのころの教授は社会的地位も高く、また、このあたりの土地も安かったにちがいない。だが、当時の大木で残っているのは、叔父が首を吊った泰山木だけのようで、敷地も六分の一ぐらいになってるらしい。

叔父が自殺したあとの、この日記ノートだが、ぼくは、叔父のわるい冗談だとおもった。

わるいというより、つまらない冗談だ。もちろん、自殺する前に、叔父は書いたのだと……。

叔父は、毎日、日記ノートを書いていたわけではないが、死んだ十月十二日前後に、いくらか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com